

川と人

Vol.22
2003

特集

北海道 川の日ワークショップ報告

Photo:北海道遺産、石狩川の上流(愛別町・豊愛橋から)



多くの支流を合流して、石狩市で日本海に注がれる

北海道遺産・石狩川

北海道遺産とは、北海道の豊かな自然やそこに住む人々によって築き上げられてきた文化や産業、生活などさまざまな価値の中から、北海道独自の視点と道民参加で選ぶ、次世代に引き継ぎたい有形・無形の財産のことです。4,006件の候補の中から、第1回選定25件が選ばれ、石狩川が北海道遺産となりました。

*選定理由

大雪山系を源とし、上川、空知、石狩の大平野を形成して日本海に注ぐ道内随一の大河川。北海道開拓の歴史の中で、度重なる洪水と闘いながら、舟運や運河が内陸への交通・物資輸送の道として多大な役割を担い、鮭などの漁業や各種の用水利用など、石狩川は北海道発展の歴史や文化が刻み込まれている母なる川です。

*期待される効果

今日において、安全で豊かなふれあいのある河川の実現を目指して、地域の意見を反映した川づくりのために、さまざまな取り組みが行われています。北海道を代表する河川である石狩川でそれが先導的に行われるならば、その波及効果は大きいでしょう。

監修 北海道開発局
発行 (財)石狩川振興財団 〒060-0051 札幌市中央区南1条東1丁目5番地 Tel (011)242-2242 平成15年3月

ホームページアドレス <http://www2.ocn.ne.jp/~ishi-riv/>



特集 北海道 川の日ワークショップ報告

いい川のイメージを見つけ、いい川づくりに参加しよう



川の日ワークショップとは

全国版「川の日ワークショップ」は、市民と行政が一緒になって、川への関わり方や川の価値観といった官民の違いを認識しつつ、「いい川」のイメージを探っていくもので、毎年7月7日「川の日」に東京で行われています。

北海道はたくさんの川が流れ、市民の河川愛護活動や河川事業も数多く行われています。そこで、北海道のいい川を探り、北海道らしい川づくりをはじめることができないか。そのきっかけづくりとして、平成14年7月6日、札幌市内で「北海道川の日ワークショップ」が全国に先駆けて行われました。

北海道らしさを求めて準備会としてスタート

一次、二次審査で発表者を選ぶ、全国版の地区予選という形ではなく、今回は準備会という位置付けで、全国版のいい点を取り入れ、北海道独自の視点を盛り込みました。まず、団体に参加を呼びかけ、発表者はパネルやスライドを使って3分間で活動内容を発表。その後、審査を行うコメンテーターと発表者との7分間の質疑応答です。情報交換と交流を第一に、今回は全参加団体が活動にちなんだユニークな賞を受けました。

コメンテーター達から「北海道はすごい!」と賞賛をあげた熱い発表を、特別賞を中心に振り返ります。



CONTENTS

特集 北海道 川の日ワークショップ 報告

【釧路開発建設部治水課】
釧路湿原の河川環境を守る釧路湿原川レンジャー活動 ————— 3

【石狩川開発建設部千歳川河川事務所】
漁川第4号床止魚道工事 ————— 4

【幾春別川をよくする市民の会】
二匹のサケが住民意識を変えた ————— 5

【カラカネイトンボを守る会】
茨戸川・とんぼの学校 ————— 6

【札幌拓北高校理科研究部】
ホテルの光よ、拓北川にあふれろ!! ————— 7

自然再生推進法と自然再生事業について ————— 8

北海道開発局 建設部 河川計画課

キーパーソンに聞く ————— 9.10

【北海道環境財団理事長 辻井 達一氏】
湿地の活用と石狩川の自然再生にむけて

流域の現在

【美唄市】宮島沼がラムサール条約に湿地登録 ————— 11

【江別市】江別河川防災ステーションオープン ————— 12

石狩川の歴史

シリーズ
石狩川流域発展の礎・治水
第1回
石狩原野の開拓
石狩川治水計画の樹立- 13~15

リバーズトピックス

北海道開発局 ————— 16

平成15年度北海道開発予算(河川関係)について

北海道開発局 石狩川開発建設部 ————— 17

【おやふるしゅうずいり】
「石狩川 生振捷水路」土木遺産に認定される

北海道開発局 旭川開発建設部 ————— 18

魅力ある都市空間の整備を目指して

札幌市 ————— 19

河畔林を生かした豊かな水辺環境の創造 —準用河川ポロベツ川—

ニュース&ニュース

永山新川通水式行われる ————— 20

第44回 旭川冬まつり ————— 20

千歳川 光と氷のオブジェ ————— 20

石狩川振興財団 活動報告

21世紀の川づくり「石狩川シンポジウム2002」 ————— 21

H14.石狩川サミット シンポジウム 兼 第2回シェルパ会議 ————— 22

編集後記 ————— 22

特集
北海道
川の日ワークショップ
報告



回帰したサケの見学会



日、午前11時頃、数10匹のサケを確認。その姿を見ようと、連日、たくさん市民が集まりました。



場所は恵庭市内でも中心部、目の前でサケが上り、自然産卵する！



子供達も遊べるよう自然石を使った多段式の魚道。

漁川第4号床止魚道工事

漁

川は恵庭岳から恵庭市内を通り、千歳川に合流する約45kmの河川で、アイヌ語のイチヤニ（サケが産卵のために掘る穴）が由来です。この漁川を、たくさん魚が遡上できるようにするため、床止に魚道を設置することになり、ワークショップを開催しました。サケの会が中心となって、学識経験者・魚の専門家・学校関係者・行政などが参加して、2mの落差を解消するための方法や、これからの漁川のあり方について話し合い、魚道の入口を見つけやすくするための呼び水式の利用、自然石の使用、魚が休める場所を造るなど工夫して、平成13年3月に完成しました。



行政部門特別賞

サケもふるさとに
帰りたくなるで賞

〔石狩川開発建設部千歳川河川事務所〕



日本最大の面積を誇る、釧路湿原

釧路川の下流にある釧路湿原は、面積が約2万haの日本で最大の湿原です。特別天然記念物のタンチョウやキタサンショウウオなど稀少な動植物の生息地で、昭和55年に日本で初めてのラムサール登録地、62年には湿原単体では日本初の国立公園になりました。しかし、ここ50年間で面積が約2割も減少、植物もヨシ群からハンノキ林に変化しています。そのため湿原を守るための検討委員会をつくり、市民の意見を聞きながら12の施策を提言しました。この一つが平成12年に発足した市民のボランティアによる川レンジャー活動で、釧路川や釧路湿原の様子を観察、報告する観察活動と、専門家の話を聞いて野外活動を行う学習活動を行っています。



全国水環境特別賞

釧路湿原をきちんと
次代に残しま賞

〔釧路開発建設部治水課〕



特別天然記念物のタンチョウ

釧

路川の下流にある釧路湿原は、面積が約2万haの日本で最大の湿原です。特別天然記念物のタンチョウやキタサンショウウオなど稀少な動植物の生息地で、昭和55年に日本で初めてのラムサール登録地、62年には湿原単体では日本初の国立公園になりました。

釧路湿原の河川環境を守る
釧路湿原川レンジャー活動

質疑応答

Q: 質問者 A: 発表者

Q. みんな河川事務所の人なんですか？毎日こんなに楽しく仕事をしているの？

A. このような事をやる楽しさは、こういう機会じゃないとできないので。みんな泊まり込みで練習しました。

Q. 入口をつけて全部のサケが上っているんですか？

A. 前は上流にはほんの数匹しか上っていませんでしたが、数十匹も上れるようになりました。

Q. ウグイ、ヤツメの生態行動から見て、魚道はどうですか？

A. 4号床止めは、魚道ができてさらにウグイがたくさん上っています。

Q. 漁川の素晴らしさ、川のことを良く知っている人の知恵を活かしていくことについては。

A. 川の近所に住んでいる方、川の専門家、行政、学校関係者等が集まって、意見を交換した結果、本当に良いものが造れたと思います。

質疑応答

Q: 質問者 A: 発表者

Q. パネルでは“きょうりょく”が“強い力”になってますが。

A. 官だけではひじょうに微力。協力することで強くなるという掛け合わせです。

Q. ゴミ拾いのほかに何をしますか？

A. 日常の中で釧路湿原や釧路川の異変に気づいたら報告する観察活動で、寄せられるのはゴミの散乱、珍しい植物、密漁に関するものです。もう一つは、季節毎、年4回行う湿原の勉強会。タンチョウ、魚等について専門家の話を聞いて、フィールド学習します。

Q. 川レンジャーの資格と、メンバー数を教えてください。

A. 15才以上で、それ以外の制限はないです。今年は101名の市民が活動しています。

Q. 子供レンジャーと川レンジャーの関係は？

A. 川レンジャーの資格は、日頃の生活の中で、ある程度意識を持って、情報を寄せてもらうという意味で15才以上にしました。子供レンジャーには、国立公園の連絡協議会が主催する子供レンジャーと、環境省の子供パークレンジャーがあります。フィールド学習を子供レンジャーと共同でしたが、他の団体との連携はこれからも続けていきたい。

行政部門の発表を終えて

質問者：魚道がふたつエントリーしましたが、お互いにどうでした？

銅蘭川：コンクリートを使わず、玉石の配置で流れないような工法をとっているの、湧水があってもそのまま出るような形になる。

漁川：専門家からご指導いただいています。自分達の川が一番です。（笑）



その他の行政部門発表団体

受賞名	応募団体	事業・テーマ
河口干潟はワクワクできるで賞	室蘭開発建設部治水課	鶴川河口自然再生事業
マイナスをプラスに賞	旭川開発建設部名寄河川事務所	銅蘭川魚道工事
特別賞・いい川づくりで水の気持ちが変わった賞	恵庭市建設部	茂漁川ふるさとの川モデル事業

特集
北海道
川の日ワークショップ
報告



親子で参加して、トンボを捕ったり、自然を観察したり...



夢見て。
れあえる場を
と自然とがふ
あらゆる人達
をしています。
る地域づくり
物の生息でき
付けて、トンボをはじめ各種動植物の生息できる地域づくり



バイオブロックでの植樹、作った子供達のメッセージも。

親子で参加して、トンボを捕ったり、自然を観察したり...
01年10月に、バイオブロックを子供達と一緒に作って植樹しました。今後も楽しみながら、この活動を続けていきたいと考えています。今年の6月8日にピオトープを「茨戸川・とんぼの学校」と名付けて、トンボをはじめ各種動植物の生息できる地域づくりをしています。
ラカネイトトンボは、体長が2・5cmの唐金色の素敵なトンボで、札幌市では篠路福移湿地にしか生息していません。篠路福移湿地は、現在埋め立てが進められ、動植物の宝庫は消滅の恐れがあります。私達は、この動物を助け出したいと、生き物救出大作戦を開始しました。河川事務所に相談して現場の一部にピオトープを作ったんです。



水棲生物調査



数が激減している小さなヤチウイも生息!



茨戸川・とんぼの学校

市民活動部門特別賞

ピオトープで賞

「カラカネイトトンボを守る会」



三笠市、岩見沢市、北村の流域連携で行われたトムソーヤキャンプ



サケの稚魚放流壮行会



川岸を花で彩る、幾春別川フラワーライン

92年10月、岩見沢市内の小学校の先生と生徒が放流していたサケが110年ぶりに帰ってきたことをきっかけに、商工業者や学校の先生と父母達など、総勢22名で「幾春別川をよくする市民の会」を発足。流域の町内会にも、「この川を市民の憩いの場に、子供達に川の素晴らしさを教えたい」と説得し、本当の意味で市民の会になりました。
サケの飼育から始め、石狩川合流点までのサイクリング、野外炊飯、植樹、カナダの子供達とも交流しました。また、町内会の長老の提案で、川の本作りが始まり、小学校の副読本も作りました。行政の若手職員がたっくさんのアイデアを出したり、流域のまちで「トム・ソーヤキャンプ」をしたり、いろいろな活動をしています。現在、会員数3,788名です。



市民が作った「幾春別川物語」。



市民活動部門特別賞

二匹のサケが
まちを変えたで賞

二匹のサケが住民意識を変えた

「幾春別川をよくする市民の会」

質疑応答 Q: 質問者 A: 発表者

Q. 会員はどれくらいですか?
A. 約180名ほどです。

Q. ピオトープを『とんぼの学校』という名前にしたのが、大変おもしろい。
A. 自然とふれあえる体験学習的なものを目指しています。石狩川流域の湿地帯がなくなって、唯一札幌に残っている、この自然を子供達に教えていきたい。トンボの研究活動が発端で、まちの方々、企業、行政の協力を得て、こういう活動になってきました。

Q. 札幌市内でそれを残すのは、むずかしいですか。
A. 約600名ぐらいの地権者に連絡をとりたいと思っていますが、むずかしいです。名前を知るために地籍図をとって調べていますが、網羅できない状況です。
Q. 子供達の参加形態は? 一風変わった先生に連れて来られるんですか?
A. 地域の小学校と交流機会を持っているので、いろいろな機関にチラシを配ったり、小学校の先生と話したり。親と子で一緒に来るというケースが多いですね。

質疑応答 Q: 質問者 A: 発表者 C: コメンテーター

Q. 行政がやれば良いという話を、市民主体で盛り上げた。市役所や行政はどう関わったんですか?
A. 町内会側から提案があって、事務局を市役所内部に置いています。住民にすれば、誰が河川管理者かということとはわかりにくいので。
Q. 会員数約4,000名というのはすごいですね。どういうふう広がったんですか?
A. 最初は町内会単位で一口500円の会費で、二口以上お願いして、活動を重ねるに従って個人で入っていただけになってきました。

Q. 地元町内会との関係づくりのポイントは?
A. 流域の町内会は12で、川沿いの小・中学校も含めて活動しています。幾春別川は暴れ川で、嫌な思い出がたくさんあったが、遊んだ思い出もある。川をその頃に戻したいというお年寄り達の思いが伝わったと思います。
C. 川の本『幾春別川物語』ができるというのは、日本の川文化の特徴で素晴らしいことです。『ミシシッピ川物語』『テムズ川物語』という本はないんですから。



市民活動部門の発表を終えて

質問者: 行政へのお願いやパートナーシップのアイデアを聞きたい。
恵庭カワセミの会: 活動拠点を簡単に借りることができれば。
遠軽町河川愛護少年団: 若い人につながっていかないと悩む。自分を忘れて参加してくれない。活動している人は変人扱いです。(笑)

その他の市民活動部門発表団体

受賞名	応募団体	事業・テーマ
多様な当事者をつないでいいルールづくりで賞	NPOしりべつりパーネット	川利用のルール作り
川の楽校が川を育て人を育てるで賞	遠軽町河川愛護少年団	川の楽校
カワセミですばらしい自然を子供達に伝えま賞	恵庭カワセミの会	カワセミの棲める川づくり
特別賞・売り買いを超えた企業の意識改革をすすめ賞	NPO十勝多自然ネット	売買川の魚道設置と流路のハビタット造成
北海道とロシア Eポートでつなぎま賞	宗谷建設青年会	最北端のEポート大会
グラウンドワークですてきな環境のまちづくりをすすめ賞	NPOグラウンドワーク西神楽	自然との共生・協働による地域づくり
論より植、森も川も人もたくさん育てま賞	バイオブロック工法普及連絡協議会	石狩川流域300万本植樹運動環境林造成における地域指導者養成

ホタルの光を
川にともしま賞

【札幌拓北高校理科研究部】



ホタルの光よ、拓北川にあふれる!!

札幌市北区あいの里にへイ

ケボタルを自生させるため、7年前から活動してきています。卵を採取して育て、翌年の6月頃に小学生と放流、7月には「光観察会」をします。ホタル池は、拓北川河岸の湿地で、5年前までは干上がってしまいましたが、札幌市河川課の設置した浄化装置で湿地の状態を維持、今は良い湿地になってきました。ホタルにとって棲みやすい環境は、エサになる巻き貝がいて、巻き貝が食べる藻があり、巻き貝が食える藻に日光があたり、さまざまな動物植物が息をし、水はきれいで浅く緩やか。岸はさなぎを作れる土。そんな環境に近づけたい。



近隣の小学生と育てたホタルを放流。

特集

北海道 川の日ワークショップ 報告



ホタル池をみんなで調査。

先輩達はトンボの生態研究で、環境庁長官賞を受け、オランダで行われたEUYヤングサイエントリストコンテストに日本代表で発表しました。僕達もそれ以上の成果をあげて、良い川とそこに広がる良い湿地を作っていくような頑張りたいです。



たくさんの生物がいる広い研究室。小学生や住民も気軽に入ってくる。

【自然再生推進法の概要】

平成15年1月1日に自然再生推進法が施行され、過去に損なわれた自然環境を取り戻すための取り組みとして自然再生事業が推進されることとなりました。法律の趣旨は次のとおりです。

- 自然再生を総合的に推進し、もって自然と共生する社会の実現を図り、あわせて地球環境の保全に寄与することを目的とするもの
- 自然再生事業を、NPOを始めとする地域の多様な主体の参画と創意による地域主導の新たな形と位置付け、その基本理念、具体的手順等を明らかにするもの

※自然再生とは、過去に損なわれた自然環境を取り戻すため、関係行政機関、地域住民等、地域の多様な主体が参加して自然環境の保全再生を図ることを指す。

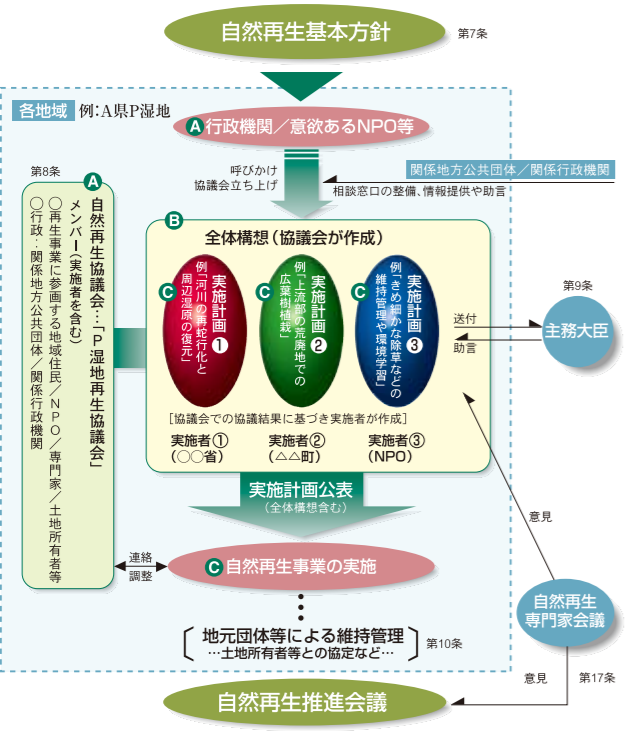
新しい形の事業 「自然再生事業」が はじまります

取り戻したい自然、育てたい自然を住民の手で



自然再生事業実施の手順

- A 自然再生の実施者(意欲あるNPO、行政機関等)は、地域住民、NPO、専門家、関係行政機関等とともに協議会を組織する。
- B 協議会は、全体構想を作成する。
- C 実施者は、協議会の協議結果に基づき実施計画を作成し、事業を実施する。(国及び地方公共団体は必要な協力を努めます)



北海道開発局では、北海道の自然再生事業に関する相談窓口を設置しています。
⇒北海道開発局建設部河川計画課まで

【先導的な北海道の事例】

国土交通省では、自然再生推進法の施行に先立って、平成14年度より、これまでの川の整備や流域の開発によって失われた川本来の姿を復活させるため、流域の視点から「川のシステム」を再自然化する自然再生事業^{※1}を実施しています。

世界的にも先進事例である「釧路湿原の保全」に関する自然再生事業では、釧路湿原の乾燥化を防止し、野生生物の生育・生息環境の保全、景観の保全を推進するため、学識経験者等からなる「釧路湿原の河川環境保全に関する検討委員会」において検討されている保全策(土砂流入防止、地下水位回復など)を実施しています。実施にあたっては、極力人間の手を加えず自然の復元力を活かす、アダプティブマネージメント^{※2}の概念を導入します。また、計画段階から実施・管理段階まで地域住民、NPO、関係機関等との積極的な協働・連携を進めています。

このほか、シギ・チドリなど渡り鳥の飛来を再現するための「鶴川河口における干潟の再生・保全」、サケ科魚類の遡上環境・自然産卵環境の確保・保全のための「標津川における河道の再蛇行化(氾濫源復元)・河畔林再生」、また、カワヤツメなど生物の生息環境の復元のための河岸再生など「石狩川下流域における自然再生」について、調査・試験等を実施しています。

※1 必ずしも自然再生推進法による「自然再生事業」ではありません。
※2 取り組みを進めるにあたっては、実施効果の評価結果を適宜実施へフィードバックさせつつ段階的に実施すること。



鶴川河口の干潟再生試験地



現河道(直線)

旧河道(蛇行)

釧路川蛇行復元区間



標津川蛇行復元試験区間

質疑応答

- Q: このクラブに入ったきっかけは？活動を通して変わってきたことは？
A: 前はホタルとか見たこともなくて、あまり興味もなかった。この高校に入ったのはこの部活に入りたいと思い始めたから。ホタルの幼虫の世話をしてから、拓北川がいっぱい光るように飛ばしたいな、と思うようになりました。
- Q: 活動の中で一番苦労する点は？
A: やっぱり生物だから、休みがないのが一番つらいです。
- Q: 1週間のうちでどれぐらい時間を割いているの？部員は何人くらい？
A: 時間帯としては、放課後の4時から始めて、遅い時で12時くらいまで。部員は今4人です。

総合学習部門の発表を終えて…



質問者: 総合学習を発展させるために、どんなものが必要ですか？
水環境北海道: かわ塾の常設というご指摘をいただいたが、ボランティアなので平日がむずかしい。誰かに資格を取らせないと、と思っています。
拓北高校教師: 小学生に理科研究部に入って、「トンボを捕ったり、ホタルを育てよう」と誘うがうまくいかない。小・中学校でこういう活動をしていくことが大切です。

その他の総合学習部門 発表団体

受賞名	応募団体	事業・テーマ
川塾で子供が育ったで賞	鶴川沙流川交流会	川と歩もう21世紀
川に目を向ける子供が未来のいい川をつくるで賞	NPO水環境北海道	千歳川「かわ塾」の活動
特別賞・大きくひろがれワッキーの環賞	島松小学校PTA柏木川プロジェクト	島松小学校PTA柏木川プロジェクト

今年から本格開催 2003 北海道川の日ワークショップ 4月に帯広市内で開催予定



「スーパーリンク」に

辻井 達一

北海道環境財団理事長 / 国際湿地保全連合日本委員会会長 / 北海道遺産構想推進協議会会長



プロフィール
1959年、北海道大学大学院博士課程修了、農学博士。釧路湿原をはじめ、国家的な湿地や湿原の保全活用について、精力的に活動。

湿地を知り、 湿地を活かす

湿地というのは極めて広い概念で、淡水の湿原から海岸の干潟、湖岸、マングローブ林などまで含まれます。湿地の保護をテーマとするラムサール条約でいう「ウエットランド」は、藻場、珊瑚礁、水深6mまでの浅い海、季節的な冠水の陸地の15%を占めるといふ計算もあります。

湿地は一般に平らなところに多く成立しますから、人間にとってもいけば使いやすい場所です。多くの湿地が、それこそ人間の社会が成立した頃からさまざまな形で利用されて

きました。マンモスなど大型獣の狩猟の場として使われた場合もあり、水田とされたところもあるわけです。多くの都市もまた湿地や、湿地を控えた場所に形成されたのです。

いわば人間は古代から湿地を利用してきたことになりませんが、その反面、自然の湿地は次第に減少することになりました。

さて、湿地は、さまざまな生物を育む場でもあるのですが、その面でもまだ把握されていないことも少なくありません。干潟ではそこに住む生物たちが溜まった栄養物質を分解して浜辺をきれいにしています。多くの水鳥達が湿地を繁殖地とし、あるいは中継地としています。生物の維持だけでなく、そもそ

も湿地は水を貯める機能が大きくて、いわば水面の見えないダムだとも言えます。このダムは、水だけでなく温度を維持する働きも持ちますから、地域気候の緩和にも役立っています。湿原では植物が泥炭の形でCO₂の蓄積を通じて、今、問題になっている地球温暖化の防止に一役買っています。湿地は私達の生活に密接に関わっている存在なのです。

湿地の活用と 石狩川の自然再生に むけて



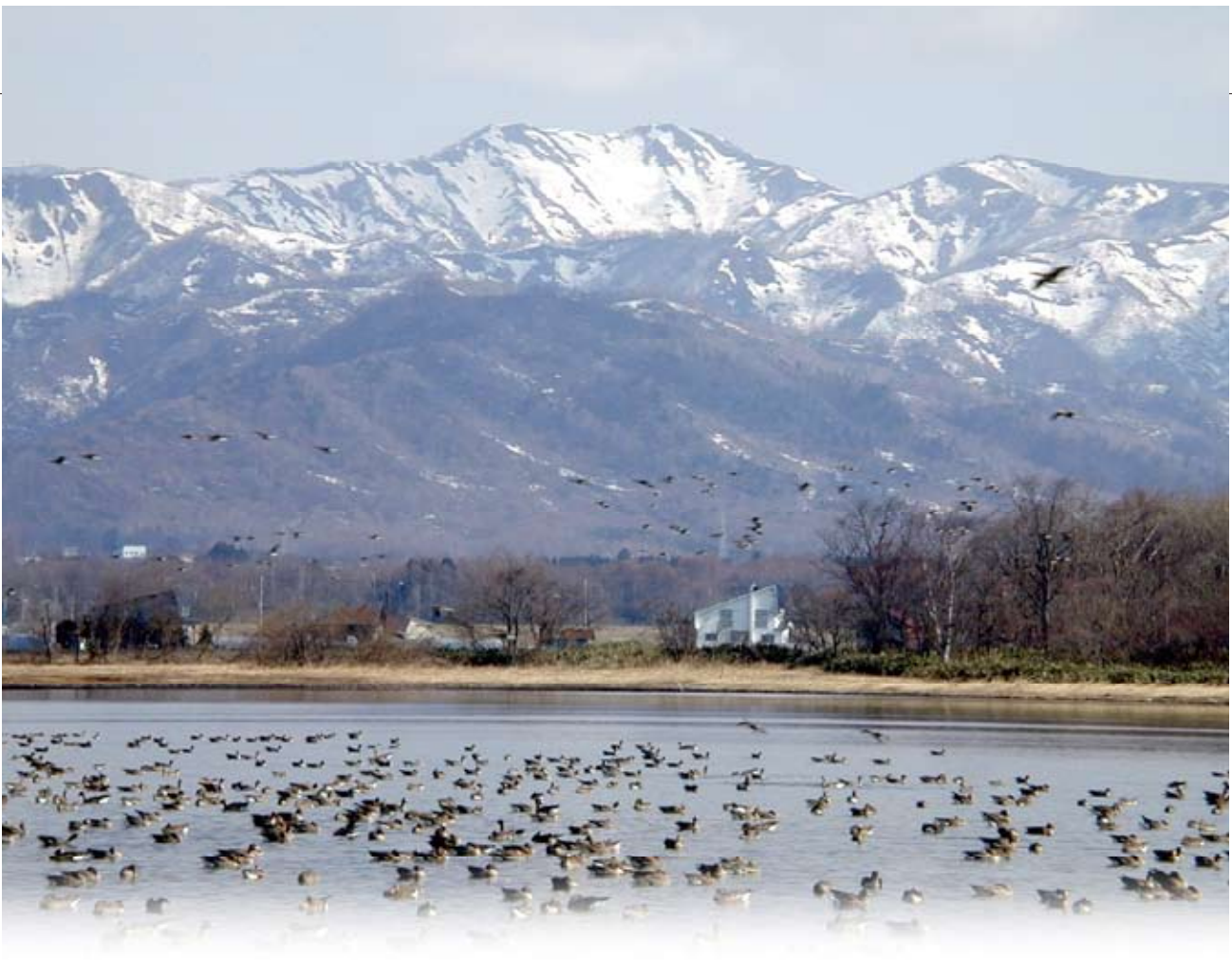
離された三日月湖には、既にそれなりの生態系が成立していると考えなければなりませんから、それを使う場合でも周知の注意が必要です。

けれども本州に比べれば北海道の場合は歴史的に大きく自然の変換が生じたのは比較的近年ですから、かなり十分な「再生すべき自然」の想定が容易です。実際に、それを見ていた人もいるし、データも残っているのですから。この点では古くは千年単位で人間の影響を受けてきた本州よりも有利だと言えるでしょう。

石狩川の 自然を考える

石狩川は北海道でもっとも長い流程を持つ河川です。しかし、その流域に上川平野、空知平野そして石狩平野という大きな平野を持つことから、人の集まりも大きく、土地利用も早くから進んできました。流域に広がっていた湿原は排水され、都市に発展していったのです。自然の湿原は今、ごく一部にしか残されていません。

しかし、流域には三日月湖や、昔、湿原があった頃の名残の沼などがかなり残っています。その一つの宮島沼は昨年のラムサール条約会議（パレンシア）で国際保護湿原に登録されました。こうした水面を含めて、その保全を通じて石狩川の自然度を高めることを考えるべきでしょう。



←昨年のラムサール条約会議で、国際保護湿原に登録された美瑛市・宮島沼。

自然再生で 大切なこと

自然再生には、まず、何を再生するのか、どの時点に戻すのか、ということが大切です。たとえば川の再蛇行化などもその一つですが、直線化したにはそれだけの理由があったはずですし、その場合に求められた機能は維持されなければなりません。また、かつて切り



←釧路湿原は、辻井氏が委員長を務めた「釧路湿原の河川環境保全に関する検討委員会」でまとまった、保全策が実施されている。

河岸にワンドを設けたり、河畔林を増やしたり、洲を造ったりして、いわば単調だった河岸を多様化することも考えられます。それは鳥や魚だけでなく人にとっても大切なことです。

河川や河川敷だけでなく、先に挙げた古川や、近いところにある森林、崖、小山なども「石狩川の自然」に加えて考えることも必要で、効果的だと思えます。



洪 水時の水防活動や緊急復旧活動の拠点となる河川防災ステーション。北海道第1号として、平成14年10月5日にオープンした江別河川防災ステーションは、防災機能はもちろんのこと、新しい魅力を持った川の施設として期待されています。

すでに完成している、管理棟とバリアフリーを考慮した船着場は、全国Eポート大会をはじめ、流域の交流や親水事業に活用されています。そして管理棟に合築して完成したのが、河川や防災情報の提供、江別の見所・食べ所、眺望を楽しむテラスや屋上展望デッキなど、常に開放している施設です。

江別河川防災ステーションオープン 安心と、交流と、歴史と

目に飛び込んでくるのは、開拓期に江別港を拠点に石狩川を航行した、外輪船「上川丸」をイメージした舟形の外観と、空間に浮かぶレプリカです。舟運のまち・江別の昔と今を併せ持つ、石狩川の旅の途中で立ち寄りたい、素敵な川の駅が誕生しました。



8月に行われた第6回全国Eポート大会。流域の交流の場に。

河川情報、川の学習コーナーを設け、防災意識を啓発。



空間に浮かぶ「上川丸」のレプリカは圧巻。



江別河川防災ステーション

千歳川右岸・石狩川合流部から約0.9km
 ○開館時間/10:00~19:30
 ○休館日/毎週月曜日(月曜日が祝日の場合はその翌日) 年末年始12/29~1/3
 江別市建設部治水公園課 ☎011-381-1040 防災ステーション ☎011-381-9177

<http://www.city.ebetsu.hokkaido.jp/benri/11-1bousai.html>



昨年の11月にスペインで開かれたラムサール条約第8回締約国会議で、美唄市の宮島沼が登録湿地になりました。

宮島沼は、石狩川の中流域に位置する41haの三日月湖で、約50,000羽の国の天然記念物・マガンが羽を休める日本最大の渡りの中継地です。美唄市では専門家や市民とともに、研究と議論を重ね、そこで得られた提案を盛り込んで、平成14年3月に「宮島沼保全活用計画」を策定しました。守り育て活用する「ワイズユース」という2つの視点で、自然、農業、観光、人・教育の4分野11施策を進めます。

ラムサール条約に湿地登録 世界に誇る宮島沼との共生をめざして

沼のまわりは水田で、マガンによる食害問題も抱えています。人と自然との共生のむずかしさ。美唄市では、市民組織「宮島沼の保全と活用を進める会」を設置し、みんなでできることから一歩ずつ進めようと、参加を呼びかけています。



地元農家、研究者、市職員がいっしょになって議論を交わした「宮島沼フォーラム」

スペインでの認定証授与式。世界のNGOのメンバーも参加し、交流を深めた。



ハクチョウやカモも多数飛来。約70,000羽の水鳥を支える宮島沼。



「宮島沼の保全と活用を進める会」

美唄市企画財政部企画課企画係
 ☎01266-2-3131 内線2113-2114
 ○4/22~26 市民探鳥会 マガンを数える会
 ○宮島沼 美唄市西美唄町

<http://www.city.bibai.hokkaido.jp/>

石狩川 流域発展の礎・治水

「石狩川 流域発展の礎・治水」は、石狩川治水促進期成会設立50周年を機会に、100年におよぶ石狩川の治水事業への理解を深めていただくために発刊した写真集です。他例をみない、先導的な石狩川治水事業が、流域の土地の高度利用を促し、治水事業の効果が発現されるなか、現在、なお洪水の恐怖から逃れられない現実を理解していただくとしたものです。貴重な資料が満載された「石狩川 流域発展の礎・治水」から、石狩川を代表する治水事業について、全3回のシリーズで紹介します。

第1回

石狩原野の開拓 石狩川治水計画の樹立



官設鉄道空知太線決壊の状況(北海道立図書館蔵)

明治の初期には、比較的冠水の少ない高台が農耕地に選定され、洪水と移住民の棲み分けがされていた。しかし、この大水害があった明治31年までの5年間で36万人の移民があり、石狩川流域だけで全道人口の半分を占めるまでになっていた。このため、開拓地は洪水氾濫区域まで広がっていた。明治31年は、4月中旬の融雪洪水から始まり毎月のように洪水が起こっていた。さらに、8月下旬から相次いで低気圧が北海道を襲い、9月6日から8日にかけて、札幌では158mmの降雨を記録した。この洪水で石狩平原の平地部は、ほぼ全域に渡り冠水し、巨大な泥海が誕生した。これにより、離村、離農する者が相次ぎ、北海道開拓に決定的な打撃を与えた。流域関係者は「石狩治水同盟」を結成し、貴衆両院に石狩川治水着手の請願を行った。このため、北海道庁は治水事業を強力に進めることとし、北海道治水調査会を設立し、抜本的な治水計画の調査に取りかかった。

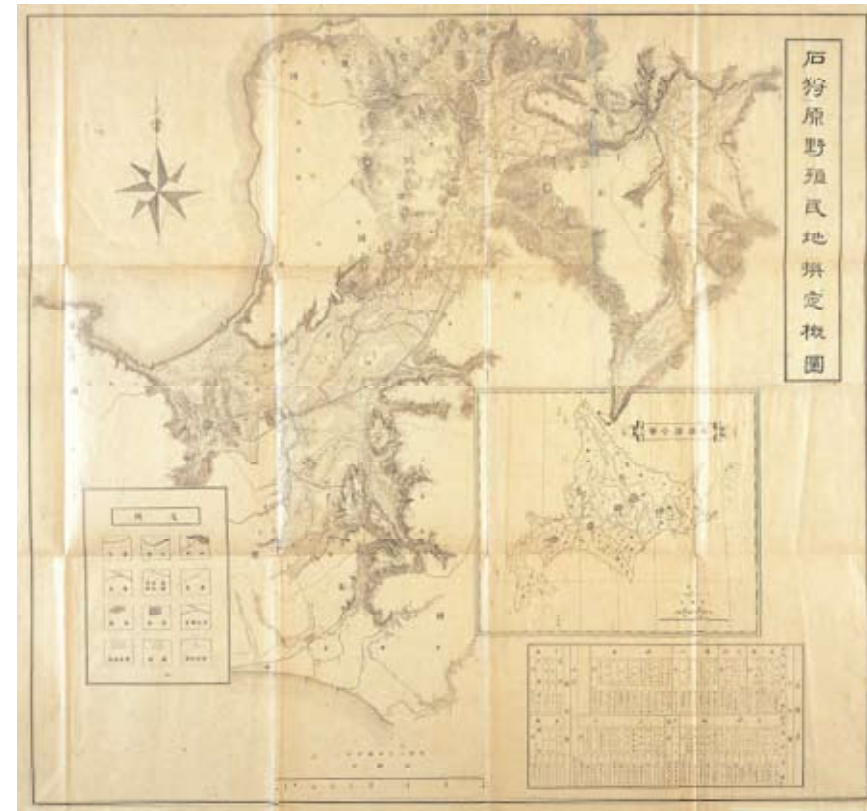
明治31年(1898) 9月6〜8日洪水



明治31年9月9日砂川市街浸水の状況(北海道大学附属図書館蔵)



明治31年11月発行の「北海道洪水概況・附図面」(北海道立図書館蔵)



石狩原野殖民地選定図 明治20年頃(北海道大学附属図書館蔵)



滝川市街地の状況(「滝川河川事務所史」より)

明治31年に発足した北海道治水調査会は、石狩川の三角測量、河川縦横断面測量、氾濫原の地形測量などの調査を行い、明治36年に解散したが、この基礎資料を基に、岡崎文吉は洪水観測を周到な準備をもって行っていた。明治37年6月29日から7月11日の間、2回の洪水が発生し、札幌の降雨量177mmを記録し流域全体に大きな被害が生じた。岡崎は、この時の洪水観測結果の解析を行い、石狩川の計画流量を8,350.0m³/s(対雁地点)とした。これは、将来の流出量増加を見込むという卓越した発想のもとに決定されており、昭和39年公布の新河川法による工事実施基本計画策定までの間半世紀以上にわたり、計画値として用いられてきた。

明治37年(1904) 7月洪水



殖民地の開墾指導風景(「岩見沢河川事務所20年史」より)

北海道開拓の行政組織は、開拓使から三県一局へと変わり、1886年(明治19年)には内務省北海道庁が設置された。北海道庁は、農地開拓に必要な植民地選定・区画計画の策定・「土地私下規則」・「貸付予定存置」などの規則制定を行い、未開地開墾の急速な進展を目指した。なかでも、石狩原野開拓のためには、排水、かんがい、治水など農地開拓のための基礎事業が重要視され、特に排水は最も急を要する事業であった。このため、北海道庁は1886年(明治19年)に、「庁下近傍至便の地」である札幌原野排水(新琴似川と2筋の疎水渠)の工事に着手し、その後全道に展開することとした。また翌年には、札幌北部の原野を乾燥させるための小樽内排水渠(現在の新川)を開削した。治水と排水効果向上による農耕地の乾燥化の目的で、河川改修を先行的に実施する道内の治水事業の原型がここから見られる。

石狩原野開拓への布石
― 荒野を拓く ― 明治の中期

北海道開拓の行政組織は、開拓使から三県一局へと変わり、1886年(明治19年)には内務省北海道庁が設置された。北海道庁は、農地開拓に必要な植民地選定・区画計画の策定・「土地私下規則」・「貸付予定存置」などの規則制定を行い、未開地開墾の急速な進展を目指した。



幾春別川新水路(石狩川本川合流点)



樽前山砂防(錦多峰川2号遊砂地)



永山新川に飛来する渡り鳥



牛朱別川分水路(永山新川)

平成15年度 北海道開発予算 (河川関係)について

北海道の自律的な発展を支える社会資本整備として、13の一級水系などにおいて、流域・地域の特徴や特性を活かした「治水」、「利水」及び「環境」対策を推進します。

平成15年度は、都市再生、自然との共生等の対策に重点をおき、早期に効果発現する短期集中型事業や、ハード・ソフト一体となった施策の推進等により、できる限り効率的・効果的に事業を進めます。主な取り組みは次のとおりです。

地域の特徴を活かした、安全で快適な地域社会の形成

○地域の骨格を形成する
根幹的な治水対策(河川改修)

石狩川、十勝川など13の一級水系などにおいて河川改修を推進します。特に改修効果が大きい幾春別川新水路、十勝川千代田新水路等への重点投資、牛朱別川分水路(永山新川)の完成化等を行います。また、浸水頻発地帯である千歳川流域においては、千歳川放水路に代わる新たな治水対策を重点的に実施します。

- * 幾春別川新水路、牛朱別川分水路(平成15年度完成)、十勝川千代田新水路
- * 千歳川流域における治水対策等
- * 石狩川、十勝川などにおける築堤、浚渫、高水敷掘削、遊水地整備

○多目的ダムの建設

河川改修と合わせ、治水・利水機能を有する多目的ダムの整備を推進します。

- * 忠別ダム、幾春別川総合開発(三笠ぼんべつダム、新桂沢ダム)、夕張シューパロダム、沙流川総合開発(平取ダム)、サンルダム、留萌ダム
 - 土砂災害、火砕流・火山泥流災害に関する対策
- 噴火災害の危険性の高い十勝岳や樽前山の火山泥流対策と、豊平川など都市域の土砂災害に対する整備を重点的に推進します。

○環境・景観に配慮した川づくりと福祉の川づくり

13の一級水系などにおいて河川水辺の国勢調査など河川環境に関する調査を継続して実施するとともに、後志利別川(美利河ダム)などにおける魚道の設置、十勝川などにおける河畔林整備(治水の杜)など、地域住民等と連携しつつ生態系に配慮した川づくりを引き続き推進します。

また、福祉の川づくりとして、豊平川、常呂川などにおいては、河川利用にあわせて川へのアクセス道路の緩傾斜化や手摺りの設置などを推進します。

○危機管理対策の推進

迅速かつ確実な河川・火山情報の伝達のため、石狩川、十勝川などにおいて光ファイバーなど情報基盤整備を

北海道の恵まれた自然との共生による環境保全

○川の自然再生(8ページ参照)

これまでの川の整備や流域の開発によって失われた川本来の姿を復活させるため、流域の視点から「川のシステム」を再自然化します。取り組みを進めるにあたっては、地域住民、学識経験者、NPO等と連携し、アダプティブマネージメント※の概念を取り入れます。

- * 石狩川下流における自然再生(河川再生)
- * 鶴川河口における干潟の再生・保全
- * 釧路湿原の保全
- * 標津川における河道の再蛇行化モニタリング

○水環境の改善

水質汚濁が懸念されている河川・湖沼において、河川水の直接浄化、汚濁物質の除去などを推進します。その際、下水道整備や農業及び畜産系排水対策など流域として取り組むべき対策と連携し総合的に推進していきます。

- * 茨戸川水質浄化
- * 網走湖水質浄化

※取り組みを進めるにあたっては、実施効果の評価結果を適宜実施へフィードバックさせつつ、段階的に実施すること



岡崎式単床ブロックの運搬(札幌河川事務所蔵)



岡崎式単床ブロック布設(札幌河川事務所蔵)



茨戸川に現存する岡崎式単床ブロック護岸(川の博物館蔵)

岡崎文吉の治水思想 「自然主義」の背景

明治30、31年に、江別太から上流の舟運路確保のための浅瀬浚渫と流木除去が行われた。これを担当したのが岡崎文吉であった。このことについて、明治31年洪水後に「河川用小蒸気船の航行には、1・2mの水深を確保すればよく、これにより深川までの航行が可能となり、さらに上流も川舟の航路の確保ができる。石狩川沿岸の農産物の輸送は、水運によるのが最も便利で、汽車運搬よりも大いに安い。」と発言している。

このように、岡崎の低水工事の思想は、舟運に強く裏打ちされたものであった。低水路を良好な航路として維持するためには、河川自らが形づくった自然河道を保存する必要があるという観点から、凹岸の侵食防止の目的で「単床ブロック」を考案した。また、岡崎は錬鉄製ブラケット・トラスと木鉄混合ハウトラスの豊平橋の設計もしており、明治31年に架橋された。



岡崎式単床ブロック護岸 大正13年頃撮影(札幌河川事務所蔵)

「石狩川 流域発展の礎・治水」 財団法人 石狩川振興財団 発行



100年におよぶ治水史がこの二冊に

道内最初の治水計画の樹立



明治42年頃の岡崎文吉

岡崎の最大の功績は、明治42年に「石狩川治水計画調査報文」としてまとめられた石狩川最初の治水計画の樹立であった。この計画は明治43年からの北海道第1期拓殖計画に取り入れられ、「道民の困苦と移民の不安を取り除き、拓殖の効果を保持し、国家財産の被害軽減」を目的とした。

また、組織的強化のために石狩川治水事務所が設置され、具体的な工事として、

- (1) 河口～江別区間の舟運確保のための現況河道維持と洪水時の氾濫流量を流下させるための放水路新設工事。
- (2) 旭川、深川、滝川の3市街部堤防の新設。

が北海道第1期拓殖計画に組み込まれた。



石狩川治水計画調査報文(川の博物館蔵)



「北彩都あさひかわ」の河川空間整備イメージ

魅力ある都市空間の整備を目指して

旭川市は、人口36万人を擁する北海道第2の都市として発展し、21世紀に向けて北海道の拠点都市としての役割が期待されています。現在、旭川市の都心部では旭川駅周辺地区の開発整備事業「北彩都あさひかわ」が進められています。この事業は、旭川市、国、北海道が連携し旭川の中心部を駅東側へ拡大するとともに、宮前地区の旧国鉄跡地や鉄道高架によって利用可能となるJR用地を有効に活用して、都市機能の充実と強化および活性化を図り、さらに「川のまち旭川」にふ



忠別川左岸整備状況。「忠別川水辺プラザ」として、堤防の緩傾斜化や高水敷の整備を行った。

忠別川の河川整備は、「忠別川水辺プラザ」として平成11年度に認定を受け、国と旭川市が連携して整備を進めています。これまでに整備された内容は、平成11年度から平成13年度にかけて堤防の緩傾斜化や高水敷の整備を行いました。この結果、多くの市民の方々がサイクリングや散策等に利用しています。平成15年度からは、右岸側の堤防の緩傾斜化や親水性を考慮した護岸、水辺の広場整備などの、地域交流拠点にふさわしい水辺空間の整備を進めます。

さわしい、豊かな自然と調和した均衡ある市街地形成を目指す事業です。「北彩都あさひかわ」では、「都心オアシスの形成」が重要なコンセプトとなっており、その実現に向けて「忠別川の環境を活かした都心の形成」を当地区の整備方針として掲げ、忠別川の自然空間と一体となつたまちづくりを進めることになりました。



忠別川左岸利用状況。日常的にたくさんの人が利用している。



忠別川左岸利用状況。夏は、身近な水遊び場として定着。

「石狩川 生振捷水路」 土木遺産に認定される

おやふるしゅうすいろう



生振捷水路(日本海から南東、札幌市街を望む)

「石狩川 生振捷水路」が2002年度の土木学会選奨の「土木遺産」に認定され、昨年11月18日の「土木の日」に認定書が授与されました。土木遺産は江戸時代末期から1945年までに建設された土木構造物を対象に、土木学会が2000年より文化価値を評価し認定しており、全国で35箇所が認定されています。道内では旭川市の「旭橋」と石狩市の「石狩川 生振捷水路」の2箇所がこのたび認定されました。

石狩川での捷水路事業

北海道一の大河・石狩川の語源「イ・シカラ・ベツ」は、アイヌ語で「非常に曲がりくねった川」の意とも言われています。北海道の開拓は明治2年に北海道を計画的に開拓する組織として、開拓使が設置されたことに始まります。大蛇行を繰り返す石狩川の治水の歴史は、北海道開拓の歴史そのものでした。明治31年には被害家屋18,600戸、死者112人ももの洪水被害が生じ、多くの入植者が撤退を余儀なくされました。石狩川の治水事業の始まりも他河川と同様に大水害が契機となります。明治32年には北海道治水調査会が設けられ、明治42年に初代石狩川治水事務所長・岡崎文吉により「石狩川治水調査報告」がまとめられ、本格的な治水事業が始ま

生振捷水路

石狩川捷水路事業で最下流に位置する生振捷水路は延長3,655m、堤防間隔910m、平均切深12m、河床勾配1/6,000の規模で施工され、石狩川は約14.6km短縮されました。全29箇所の捷水路工事では河道が約58.1km短縮され



大正期の新水路掘削作業 ※掘削機械(エキスカベータ)

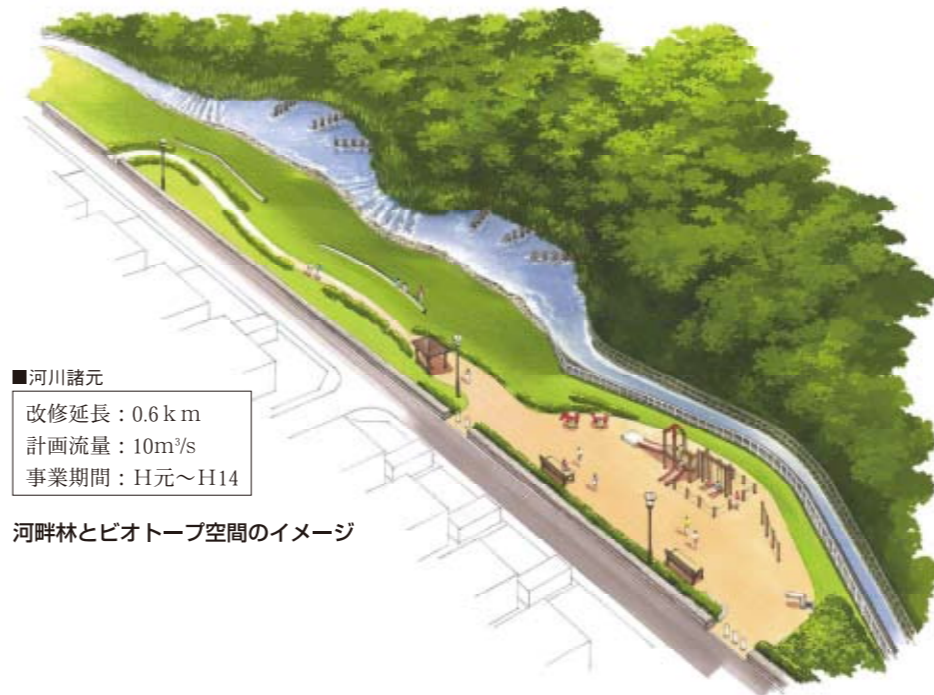
りました。最初の捷水路事業は大正7年に開始され、その後、昭和44年に石狩川本川最後の捷水路事業である砂川捷水路が完成するまで、約半世紀の間継続されました。石狩川本川における捷水路事業は全29箇所に上ります。



石狩川直水路計画図(大正6年) ※山口「捷水路」より抜粋、加筆着色

ました。生振捷水路はその内の約25%に当たり、生振捷水路が他の捷水路に比べ大規模であったことが伺えます。捷水路全体での効果としては、昭和30年頃より年平均水位は顕著に低下し、昭和62年には砂川地点(河口より86.2km)で約3.5m、石狩大橋地点(河口より28.6km)で約1.5mの低下が見られます。この河川水位の低下は、上流に広がる石狩平野の洪水被害を激減させ、広大な湿地帯の乾燥化を促進しました。その結果、約33,000haの耕作地が生まれ、わが国の一大穀倉地帯を形成するための礎となりました。道央地帯の発展の原動力となりました。

河畔林を生かした 豊かな水辺環境の創造 — 準用河川ポロベツ川 —



■河川諸元
改修延長：0.6 km
計画流量：10m³/s
事業期間：H元～H14

河畔林とピオトーブ空間のイメージ

ポロベツ川
ポロベツ川は、札幌市と江別市との行政界付近を流れる小河川で、周辺には大学や短大などが立地する閑静な住宅地が広がっています。その上流には、大都市近郊で日本でも数少ない平地林が生い茂る北海道立「野幌森林公園」があり、ここから連なる緑豊かな自然林が河岸に残されています。ポロベツ川では、この河畔林を生かして豊かな水辺環境を創出する河川整備を行っています。

河畔林の保全に向けて

平成元年に策定した当初計画は、右岸に住宅が連たんしていたことから、左岸側の河畔林を伐採して拡幅する予定でしたが、その後「多自然型川づくり」が本格化し、工事に先立ち環境調査を行った結果、河畔林には、絶滅危惧種であるシラオイエレンイソウやオオジシギなど森林公園に生息する多くの植物や野鳥が確認されました。そこで、都市部におけるこの貴重な自然環境を残すために、当初計画を変更して、右岸に接する一団の住宅地を買収して拡幅整備を行い、河畔林の保全を図っています。

豊かな水辺環境の創造

河道部は、保全した河畔林と一体となり多様な生息環境を確保するピ

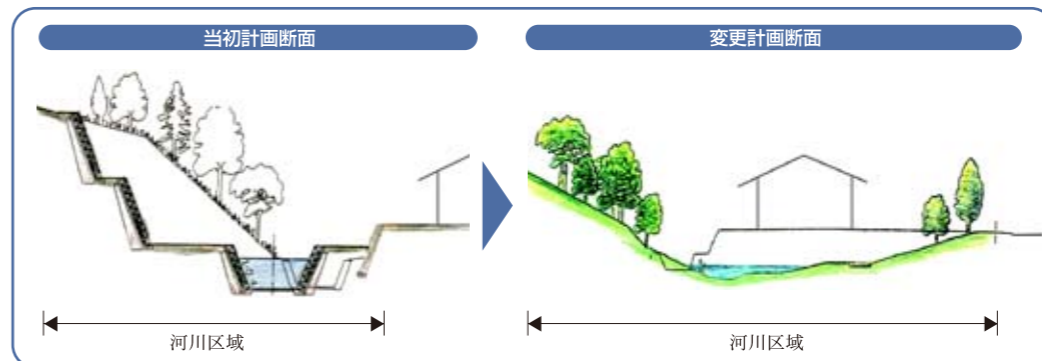
オトーブ空間を創出する整備を行っています。川筋を蛇行させ、水面幅に変化をもたせて瀬や淵を創出し、深く掘りこんだ池（ワンド）を整備する等魚類の生息に配慮し、さらに、河畔林沿いの法面は植生を行わず、自然の復元力にまかせて地域に適した環境の生育を期待しています。また、右岸の住宅地側は公園の拡張整備と連携し、河岸を地域の憩い空間として創出しています。

地域に親しまれる川づくり

今回の取り組みは、護岸形態等の工夫だけでは難しい河畔林の保全を、新たに住宅地を買収するという一歩踏み込んだ手法により実現したものです。近年、自然環境に対する



H13.河道部施工後



関心はますます高まり、今後も都市河川の整備にあたっては、残された自然環境の保全や創出、憩いの空間として地域に親しまれる川づくりに取り組んでまいります。

旭川市の中心部を流れる牛朱別川は、河道断面が小さいことから、過去何度も洪水氾濫を起こし、沿川の住宅街に大きな被害を及ぼしてきました。
このため、旭川開発建設部では、旭川市の中心市街部を洪水被害から守るために、牛朱別川が流すことのできない洪水を上流で石狩川に分流するための、牛朱別川分水路の建設を進めています。
平成14年度には、現牛朱別川と牛朱別川分水路（永山新川）との分流点に分流樋門が完成しますが、これに先立ち、平成14年9月26日に永山新川への通水式が行われました。



牛朱別川分水路対策協議会の、奥田会長の合図により通水開始。

*9/26(THU) 永山新川通水式行われる

通水式では、地域住民の方々と工事関係者が多数見守る中、牛朱別川分水路対策協議会・奥田和夫会長の合図で、土砂でつくられた堰が取り除かれて通水を開始。約30分ほどで水が分流樋門呑口に到達し、現牛朱別川と永山新川がつながりました。
牛朱別川分水路事業は、地域住民と牛朱別川分水路対策協議会等のみなさんご理解とご協力のもと進められてきました。
今後平成15年度の完成に向け工事を進めるとともに、永山新川が水と親しむ市民の憩いの場となるように河川敷等の整備を進めます。



通水完了。洪水から守り、水と親しむ憩いの場として、平成15年度に完成予定。

*2/7(FRI)⇒11(TUE) 第44回 旭川冬まつり

旭川市の冬の一大イベント、「旭川冬まつり」が石狩川の旭橋河畔を会場に、盛大に行われました。北海道の雪まつりは数あれど、「旭川冬まつり」の大雪像は世界一の大きさを誇り、しかも骨組みなど一切使わない、雪だけの芸術。今年も歌劇場をイメージし、壮大な大雪山を背景にオペラを楽しむ観客を描きました。ビル3Fほどの高さのバルコニーに上り、巨大さを体感できるのも「旭川冬まつり」ならでは。
期間中には「あさひかわ雪あかり」や「氷彫刻世界大会」も開催。また「雪の村」では、スノーモービル遊覧ソリを運行したほか、スノーラフティン、グヤバギーも楽しめるなど、広い河川敷をめぐりつつあったおまつりです。

冬もデッカク遊ぼう！ ホッカイドウ！

*1/24(FRI)⇒2/2(SUN) 清流千歳川の中州に氷の塔



冬の川の中州を利用するという、画期的アイデア。

千歳川上流の名勝地、支笏湖を舞台に1月25日から行われた氷まつりは、今回もたくさんの観光客で賑わいましたが、千歳市中心街仲の橋下流の千歳川河川敷でも、「光と氷のオブジェ」が開かれました。冬の千歳川を利用したイベントは初めてで、市民による「千歳川とまつりづくりを考える会」により開催されました。
中州を利用して作られた氷の氷塔は、夜はライトアップされ、まわりをアイスクャンドルの光が灯します。静かな冬の川に、幻想的な風景が広がりました。

あの感動をもう一度
旭川冬まつり公式ホームページ
http://www.ccia.or.jp/event/winter/



大雪山を背景にしたオペラ大劇場をイメージ。

石狩川流域の未来を担う大きなテーマについて、語り合ったふたつのシンポジウム。



平成14年度石狩川サミット シンポジウム 兼 第2回シェルパ会議

テーマ：石狩川流域の21世紀を創る(1) —農業問題を中心に—

2/5 wed 札幌市



流域の連携のもとに 21世紀の川づくり【石狩川シンポジウム2002】

10/29 tue 札幌市

水との係りから 新しい川づくりまで

基調講演 365日の川づくり

国土交通省河川局河川環境課長
岡山 和生氏



「川は地域が共有する公共の財産。川を共に地域同士が連携していければ、田口石狩川建設部長の挨拶」

流域連携に向けて—4つの提言

パネルディスカッション

続いて行われたパネルディスカッション。釧路公立大学教授・地域経済研究センター長の小磯修二氏をコーディネーターに、さまざま分野で川づくりに参加している4人のパネラーと、基調講演の岡山氏がアドバイザーに加わり、「流域連携」という大きく深いテーマについて、実体験を通じた提言がなされました。



林 芳男氏 滝川市長

「取り除かなければならないバリアはありますが、生活圏も拡大化され、1つの自治体で解決できない流れにあるので、共通する課題を流域市町村圏でともに考えていく。市民も協働意識をしっかりと持って、行政はサポーターに回る視点も必要です」

赤間 由美氏 幾春別川をよくする市民の会理事

「アドベンチャー教育を進めています。自然との関わりが子供達の生きる力にどう関わるかが課題。また、流域の農業、林業、道に関わる方達と話し合う中で、こういった交流はとても大事で、川だけに限らずもっと広げていくべきなのは」

加賀屋 誠一氏 北海道大学大学院工学研究科教授

「まず流域を生態系の最少単位として定義し、課題を流域単位で考える。人と川が影響し合える住民参加のプロセス。そして、たくさんの方が利用できる、川に顔を向けた河川敷の利用。4つ目は情報のネットワークシステム。防災情報などを流域で開放できれば効果的です」

荒関 岩雄氏 NPO法人水環境北海道専務理事

「流域の一員という共通の意識を持って、どんどん交流事業をしていく。実際に連携する場合には、リーダーの存在と官・民・企業などそれぞれの良さを引き出し、広範的な行動ができるマネージメントセクターのような存在が重要になるのでは」

編集後記

本号は、平成14年7月に札幌で開催した『北海道川のワークショップ』（いい川をめざし参加する気持ちを育む）の概要を特集として掲載しました。

北海道で初めての試みであり、また、企画より短期間の実施でありましたが、関係者の努力により、市民団体・行政・PTA・高等学校等、全道各地から18組の応募参加がありました。特集ではその一部しか紹介できなかったのは残念ですが、各団体とも川を媒体に各川が持つ個性・特性を生かしながら、地道に努力を重ね、なおかつ熱い想いを持って活動されていることを知り、私自身感動させられました。

今後も、北海道ならではの「いい川づくり」を目指して、官・民が連携し、一層の推進を図ることを肝に銘じながら、編集後記といたします。



首長同士の『対等の対話』の場に

2年に1度、石狩川流域48市町村の首長が集い、流域の課題等話し合う石狩川サミットは、過去6回の開催の中でより進化を遂げています。市町村の担当者によるシェルパ会議、そして今回の石狩川サミット・シンポジウム兼第2回シェルパ会議は、今年の11月7日に深川市で開催される「第7回石狩川サミット」を前に、首長同士が対等に話ができる場として提案され、課題をしっかりと議論を掘り下げる分科会の性格も含まれています。



石狩川流域の農業を考える

開催地であり、流域の米所である深川市長を司会兼シンポジストに、都市型農業の江別市、ワインの里・浦臼町、いちごで有名な比布町の首長がシンポジストとして出席。一層厳しさを増す農業の現状について意見交換しました。きわめてむずかしいテーマでしたが、参考にすべき取り組みや提案もあり、開催の目的通り、実りある内容になりました。

山本 要 浦臼町長

都市はこれでいいのか、農村はこれでいいのか、という率直な疑問を持っています。この疑問にどう対応するのか、私個人としても自治体の責任者としても、一番大きな課題のひとつです。

そこで、北海道の人口の6割を占める石狩川流域を、都市と農村の機能を分担し、役割をしっかりと明確に共生・連携することができないか。おおいに検討すべきで、そういうことが可能な地域と思っています。石狩川サミットで議論を進展させ、行き着いたところで行動に移してもいいのではないかと。

河野 順吉 深川市長

今日的な課題の中で一番問題なのは、後継者問題。深川では各市町村から協力いただき、北海道の担い手センターと一緒に頑張ってきたかたちで、大学に新規就農センターを設け、市町村と関係機関、住民が一体となってこれらを運営していこうとしています。

また、農業特区を申請中で、昨年から修学旅行生等がきている状況ですが、これらにはまず、農家自身の「夢の農村塾」を作ってもらっています。それから、女性のパワーというか、地域を変えていく女性の活動もキーワードになってきています。

小川 公人 江別市長

恵まれた市場条件と、優れた経営力・技術力・販売力を持つ都市型農業に取り組んでいます。江別は転作率70.4%で、苦しい転作強化の中、初冬まき小麦「ハルユタカ」が好評を博し、これからは「地産地消」や「スローフード」という、地場産品を循環させた江別の顔をつくっていきたい。

一番大事なのは農業応援団で、子供の数が減っている農村地帯の学校に、校区以外の通学を認めたら、その親達が農作業を手伝うという、雇用創出効果が出てきています。

高橋 勝寛 比布町長

今までにない、多様な取り組み、観光農業であったり、産直とかいろいろな付加価値をつける農業であっていい。いろんな取り組みを同時に展開していかなければ。21世紀の北海道は農業を中心とした体験観光、そういう時代になると思います。健康な暮らしに目覚める時期に来ている。農家はこの景観に価値があると認識を持ち、魅力ある取り組みでアグリビジネスにつなげる。石狩川流域もひとつのブランドで、大きな単位でのブランドを発信していくことも考えてみては。